

New Products Review

文：福岡紀行
撮影：星野俊



JAMES TYLER
STUDIO ELITE HD
609,000円

■コンチネンタル
ファースト
☎03-3583-8451

個性的なフィニッシュと
プロも納得のスペックが魅力!



◎SPECIFICATIONS

●ボディ：アルダー●ネック：メイプル（ボルト・オン）●指板：メイプル●フレット：22フレット●ピックアップ：セイモア・ダンカン・シングルコイル（カスタム・ワウンド）×2（フロント、センター）、セイモア・ダンカン・トレムバッカー（リア）●コントロール：マスター・ボリューム、マスター・トーン、5ウェイPUセレクター・スイッチ、ミッド・ブースト●フィニッシュ：フレッシュ・ヴォミット

◎試奏データ

●使用アンプ：フェンダー・ツイン・アンプ

■随所に丁寧なディテールが窺えるモデル

このほど、コンチネンタル ファーストが、ジェームズ・タイラー・ギターズの製品を取り扱う運びとなった。以前から楽器屋さんで見かけていたのだが、細部まで丁寧な仕上げが施されていて、少し気になる存在ではあった。今回紹介するのは、まず非常に個性的なルックスが目を引くスタジオ・エリートHDだ。近くでよく見てみると、模様の中に立体感のある凹凸がたくさん見られ、メタリックというカスケルトンというか、オイルの中に落としたインクが浮上中のような、有機的で不思議な雰囲気を持ったフィニッシュになっている。このフィニッシュはフレッシュ・ヴォミットと呼ばれていて、以前本誌で紹介したジム・ヴォミットが錦鯉系だとしたら、こちらは円谷プロ系（わかるかな？）と呼べるだろう。が、このルックスは主張がはっきりしているだけに、好き嫌いが分かれることを危惧してしまう。

ピックアップにはカスタム・ワウンドのダンカン・シングルコイル×2とスラント仕様のトレムバッカーがマウントされていて、5ウェイPUセレクターで切り替えられるようになっている。コントロールはマスター・ボリューム/マスター・トーンに、ジェームズ・タイラーではお馴染みのミッド・ブースト（アクティブ）が設けられており、幅の広い音作りができるようになっている。このスタジオ・エリート・シリーズには一貫して“スタジオなどに1本だけ持っていけば必要な音はすべて出せる”というコンセプトが採用されていて、見事にそれが反映されている。

ヘッド・ストックにボリュームがあるため、一見華奢に見えるネックだが、握ってみると実は幅が広く、フレットもゴツい。弾き始めて数分のうちにはゴガコ指に引っかかり気になったが、きっと長持ちするだろうと考え直して、好感を持つこ

とに決めた。また、握り込むフォームのままスライドして開放のEに行こうとすると、私はヘッドの下側に人差指が引っかかるが、そういう横着はするなという貴重な教えだと解釈して、好感を持つことに決めた。ネックの触感はおイル・フィニッシュに近く、ほど良く滑り、ほど良く引っかかってくれるので、汗をかいた人にもバッチリだ。

■幅の広いトーン・キャラクター

サウンド的にはミッド・ブースト・オフでドンシャリ味のストラト、ミッド・ブーストを上げていくとキメの細かいミッド・レンジが立ち始め、フルで極端に歪むファット・サウンドに変化する。また、リアのトレムバッカーはエッジのはっきりしたトーンを持っていて、ミッド・ブーストと組み合わせることで、“野太い”という印象のキャラクターを作り出すことができる。非常にソロ・ブレイ向けの、存在感のあるトーンだ。このトーンは、ストラトにハムバッカーをマウントしたサウンドとは根本的に異なるものであり、むしろレスポールに近い印象を受けた。ペグにはロッキング・タイプのもの（スーパーゼル）を使用し、ブリッジにはウィルキンソンをマウントしているため、オクターブ・チューニングは完璧に調整でき、演奏中の狂いも非常に少ない。軽くフローティングさせたセッティングだが、個人的にはきちんと調整してベタ付けにした方が、サステインも稼げるし、ボトムが暴れてくれるので好きだ。が、現実的にはあまりボトムが暴れるとジャンルによっては非常にレコーディングがしづらいので、これくらいの方がいいのかもしれない。

この他、ネック・ジョイント部の下カッターウェイ側を薄くしていたり、セレクターやポットにアクションの重いものを選んでいたり、バッテリー交換もワン・タッチですむようになっていたり、さすがプロ・ユースのモデルだと感心させられた。

セールス・ポイント

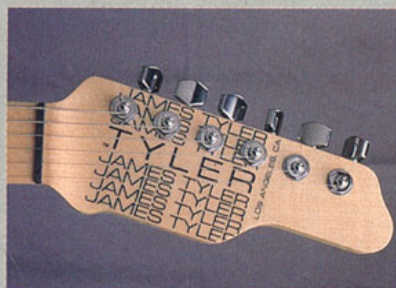
ジェームズ・タイラーの新製品スタジオ・エリートHDは、クラシック・シリーズのピンテージ・テイストを十分に盛り込みつつ、スタジオ・エリートのフレキシビリティを加味した、まさに使える1本です。カスタム・ワウンドによるダンカン・ピックアップは、その両者の持ち味を引き出すセッティングが施され、またミッド・ブースト・サーキットもHD専用のカーブとなっています。これ1本で追憶のブルージ・トーンからアグレッシブなハイパー・サウンドまで、自由自在に操ることができるのです。また、材の選択からそのセッティングに至るまで、タイラー自身による厳しいチェックにより、しっかりとそのベーシック面はバック・アップされています。仕上げはこのフレッシュ・ヴォミットに加え、通常フィニッシュがあり、590,000円からラインナップしています。（コンチネンタル ファースト広報担当者）

■ FOCUS ■

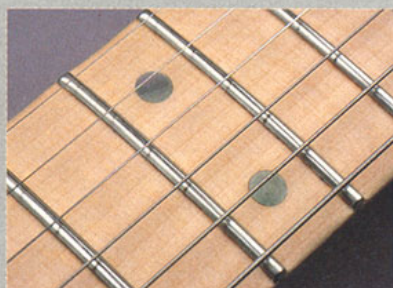


①ピックアップのレイアウト及びアセンブリの配置が特徴的だ。すべてのピックアップをスラントさせたギターというのはそうそうないもの。しかもリアのハムバッカーに至っては特別に斜めに仕込まれたスラント仕様なのである。もちろん、その狙いはこのモデルの持ち味であるドンシャリ系の基音だ。②バッテリー・ケースは回転式に開閉するようになっていて、奥の方に電極を受けるプレートが仕込まれている。この方法だと、ケースの開閉から電池の抜き取り、新しい電池の差し込みまで、片手でできてしまうので、とても便利。③ジョイント・プレートが斜めになっているのがよくわかると思う。ハイ・ポジションでのプレイをスムーズにするために、ここまで削ってくれているのが嬉しい。実際、ボディ側を垂直面に対して斜めにカットするよりも、こちらの方が非常に弾きやすく、長時間弾いても全然疲れないのだ。カッタウェイのボディ裏側部分も、普通のギターよりかなりダイナミックに削られている。

■ DETAILS ■



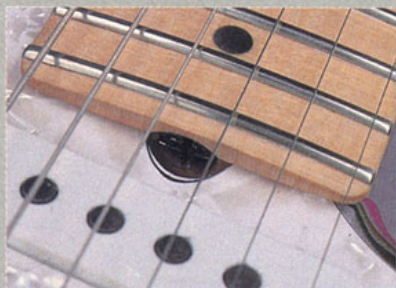
▲どこまでマジな自己主張なのか少しナゾの残るロゴ・マーク。普通こんなところまで入れる？ ヘッドの側面(下)にはシリアルナンバーの押し印が刻まれている(わかるかな?)。



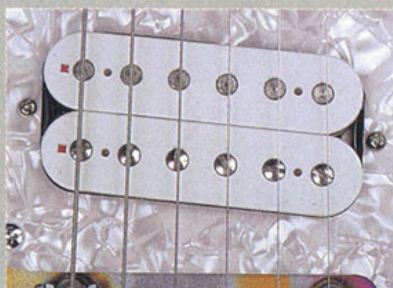
▲実はよく見るとインレイが普通のものとは違っている。表面は深いマット系なのだが、光の当たり具合によって、非常に彩度の高い色合いを見せてくれるのだ。



▲まるでコンピュータ・グラフィックのような立体感を持った模様を描かれている。真正面から見ると、斜めから見るとでは、凹凸の感じが違って見えるのだ。



▲トラス・ロッドの調整はこちらから行なう。ロッドの溝はプラス型の刻み。なんと丁寧に指板側もセンターだけ、とてもきれいに削り取られている。



▲スラント仕様のリア・ハムバッカー(トレムバッカー)。どちらのコイルのポールピースも、きちんと弦の真下に位置しているのが見てとれる。



▲これがアクティブ・ミッド・レンジ・ブースト・コントロール。あまり曲中で調整することもないと考えられて、ボリュームやトーンとは違うツマミになっている。